

ベストピア Bestopia

「パリ通信 65号」

<http://jkoga.com/>

平成二十九年五月
第六十五号

< 2017年 5月 >

古賀 順子

「アジール・フロタン (浮かぶ避難所)」

セーヌ川左岸、パリ・オステルリッツ駅の前に繫留されている船「アジール・フロタン (浮かぶ避難所)」をご存知でしょうか。

長さ 78m、幅 8,3m、コンクリート製の引き船「ルイズ・カトリーヌ号」。1919年、第1次大戦中、パリの物資が極端に不足し、イギリスから英仏海峡を渡って、石炭を首都に供給する目的で、ルーアン近郊の造船所で急ピッチで造船された平底船の1隻です。戦争の被害を受けた都市に敬意を表し、「リエージュ号」の名前が付けられます。終戦後、そのままに放置されたこの船に、次の使命が与えられます。

1929年、「救世軍」がこの「リエージュ号」を購入し、宿のない浮浪者、不遇な女性など、恵まれない人々を收容する避難所に改造します。その改造を請け負ったのが、ル・コルビュジエ(本名シャルル=エドゥアール・ジャンヌレ)(1887-1965)で、「アジール・フロタン(浮かぶ避難所)」と呼ばれるようになります。水平で横長の窓が特徴的です。

「福音の名において、いかなる差別もなくし、人間のあらゆる苦悩を軽減すること」を使命に、1865年、ウィリアム・ブースが「東ロンドン伝道会」を組織します。伝道会が生まれた場所は、ロンドンの貧者と労働者の巢窟イースト・エンド地区で、1878年、このキリスト伝道会が「救世軍」と名前を改めます。「スーフ、石鹸、救世」をスローガンに、総司令官はロンドン、各国に独自の指揮系統を構成し、救済活動を展開します。1881年、ウィリアム・ブースの娘が、フランスに「救世軍」伝道に渡りますが、宗教の違い、言語の違いは大きな壁となり、規約が出来上がるまで、20年の歳月を要します。

「フランス救世軍」が船を購入するに際し、資金を提供し、力を尽くしたのが、画家マドレーヌ・ジルハルト(1863-1950)です。同じく、画家ルイズ=カトリー

ヌ・ブレスロー(1856-1927)を生涯の伴侶とし、ブレスローから受け継いだ遺産を「救世軍」に寄付し、「浮かぶ避難所」が実現するのです。寄付の条件が一つあり、亡き伴侶の名前を付けること。「リエージュ号」から「ルイズ=カトリーヌ号」に改められます。

「救世軍」を訪れたマドレーヌ・ジルハルトは、以下のように語っています。

「聞いてください。私は画家で、いろいろな人生の苦難に耐えてきました。一度も裕福だったことはなく、そのことで苦しい思いもしました。ですが、今はもう……。最近になって、予期せぬ大金を受け取りました。それを「浮浪者」のために使っていただきたく、あなたに会いに参りました。(ミシェル・カンタル=デュパール『ル・コルビュジエとともに、「ルイズ・カトリーヌ号」の冒険』2015年、CNRS出版)

こうして生まれた「アジール・フロタン(浮かぶ避難所)」は、1930年から1990年まで、第2次世界対戦中を除き、冬の間、浮浪者を收容し、夕食とベッドを提供する救済活動の場となります。建造からまもなく100年を迎えようとする「ルイズ=カトリーヌ号」は、次の使命を待って、静かにセーヌの流れに漂っています。

自分よりも弱い者、貧しい者、恵まれない者に手を差し伸べる救済の心は、人として最も尊い行いではないでしょうか。救済の心は、人を動かし、必ず受け継がれていきます。

「パリ通信」を書いている最中に逝ってしまった友人がいます。死と闘いながら、最期まで自分らしくありたいと、家族への感謝、友人への配慮、地域社会への貢献に全身全霊を込めて尽くしてきました。救済の心に溢れる人でした。フランスに縁があり、パリに何度も来られました。セーヌの流れを眺めていると、一緒に乗った遊覧船の風や太陽を思い出します。風薫る五月、緑濃い筑後の空に、大きく昇った逆さ虹に乗って召天した友人。また五月の風が吹く時まで、さようなら。